

## 特集：国際学会参加報告

## 参加報告書—1st International Congress on Invertebrate Morphology

紺野 在（筑波大学 生命環境科学研究科博士後期課程 3年）

2008年8月17日から21日にかけて、デンマークのコペンハーゲンで開催された 1st International Congress on Invertebrate Morphology に参加した。この国際学会の主宰者は動物の体制進化の研究で世界的に知られる Claus Nielsen であり、各国から無脊椎動物の形態や発生、進化を専門とする研究者が一同に集まり、研究発表と討論を行なった。純粋な形態学に加え、無脊椎動物の神経系の形態と進化に関する発表が多く、それに関連して繊毛環や apical tuft といった繊毛構造、感覚器に存在する繊毛などの発表も複数あり、これは私の研究内容とも密接に関連しているため、この構造の重要性を再認識することができた。

私は、18日に開催されたポスターセッションにおいて Comparative studies of cilia and flagella in the ascidian *Ciona intestinalis* というタイトルで、カタユウレイボヤを用いて同一生物種内における運動性の繊毛と鞭毛のタンパク質組成、および微細構造の比較解析を行った結果を発表した。ポスターセッションにおいて様々な生物種、テーマを扱う研究者と有意義な討論を行うことができ、複数の参加者からホヤの発生における繊毛の役

割や、構造と機能の関連性に関する質問を受けた。また、特にカイメンの研究者である Dr. Sally leys とカイメンに存在する繊毛・鞭毛の種類と役割について意義深いディスカッションを行うことができた。カイメンは、細胞の機能分化の点から、生物の体制進化を研究する上で、キーとなる生物である。私が扱っている鞭毛繊毛という構造に関しても、単細胞生物である襟鞭毛虫と類似の形態をした襟細胞を持ち、また繊毛の機能分化が始まっているという点から、カイメンは興味深い対象である。

今回、多くの生物、特に無脊椎動物の発生や進化に関して、多くの講演を聴くことができ、また、私のポスターの内容に関して、多くの研究者と有意義な議論を交わせたことは、私の研究上、普段得られないたいへん貴重な体験であった。今回のご支援に対して、心から感謝したい。

Communicated by Kazuo Inaba, Received September 22, 2008.